

千葉県の酪農

「牛飼いが歌よむ時に世の中の

あらたしき歌おほひに起る」

**我** が郷土の歌人伊藤左千夫が30歳代に詠んだ短歌です。

この短歌に見られるように左千夫は東京・本所茅場町（現在の墨田区江東橋）で酪農業を営んでいました。それから百年近く経過して、生産調整等による供給量の不足から国内産のパターやチーズが品薄となっている、今日この頃です。今回のふるさと散歩は、酪農について調べてみましょう。

記録によると飛鳥時代に朝鮮半島の帰化人が孝徳天皇に牛乳の加工品蘇(チーズの類)を献じて、喜んだ天皇から姓と職を賜ったとあります。

その後、細々と乳牛の飼育と乳製品の生産が行なわれたようですが、絶対量が少なく、栄養食品として身分の高い人達の口にしかりませんでした。

江戸時代になり八代将軍徳川吉宗は、安房の嶺岡牧（今の南房総市館山付近にあった幕府の牧場）にインドから取寄せた白牛を導入、その後飼育頭数も増え、バターに似た乳製品『白牛酪』を生産し、

薬としてその一部は庶民にも販売されたようですが、広く普及することはありませんでした。

幕末の文久3年（1863年）オランダ人



牛乳輸送缶

から牛乳生産の技術を習得した千葉県出身の前田留吉が日本で始めて牛乳販売店を開業しました。

明治時代になり、政府による酪農推進（主に北海道開拓）による牛乳の栄養価の宣伝と西洋文化に触れて、乳製品の日常的な摂取



（伊藤左千夫生家前に立つ上記短歌の碑文）

への関心の高まりにより牛乳の需要は徐々に広がりをみせました。

この頃牛乳はブリキの輸送缶に入れて、柄杓で5勺（90ml）づつ量り売りされていました。

上の写真は当館2階で展示中の牛乳輸送缶です。左千夫も同じような物を使ってお得意さんに牛乳を納入していたのでしょう。

左千夫は「ほとんど毎日18時間労働した」と著書「家庭小言」で記しています。左千夫の勤勉な酪農家の一面を垣間見た気がします。

一杯のおいしい牛乳は、

生産者の日々のご苦労の賜物と言えるでしょう。

問合せ 歴史民俗資料館

☎(82)2842

訂正とお詫び

広報さんむ7月号の「さんむのふるさと散歩」竹久夢二の俳句の表記に誤りがありました。

正しくは

むらさきに 築地ハくれる

春の雪 夢

庭石に ぬれてちる灯や

星まつり 夢

竹の葉の 細りや星の

別れかな 夢

紅梅の 乳房おもたき

宵や雪 夢

訂正してお詫び致します。